

教職員情報

連載第13回

京大植物園観察会

■第50回 観察会のお知らせ

日時:5月17日(木)12:05~12:55(この後30分ほど延長する予定です。)

場所:京都大学理学部附属植物園

『京大植物園花の地図をつくろう』

ガイド:西田佐知子さん(名古屋大学博物館)

植物園前に集合してください。

第47回 京大植物園観察会レポート

2007年2月22日(木)12:05~12:55 晴れ

テーマ『イヌビワについて』

ガイド:小吹 和男(日本自然保護協会)



▲イヌビワについて説明するガイドさん ▲イヌビワ雄果実



▲イヌビワの雄果実を割ったもの

ダーウィンさんのコメントが欲しいー犬枇杷と犬枇杷小蜂の不思議な関係ー

未だ2月22日というのに、当日は、まさに「春らんまん」と言っても良い程の晴天に恵まれた植物園散策日和であった。

真冬の植物園は、木々草々の殆んどが葉を落して閑散としたものだが、見方を変える時それは一つの観察チャンスでもある。即ち、常緑樹、落葉樹の違いが一見してわかり、又森林全体を見透かせる状況から、木肌の特徴による樹種の判別が出来る利点があり、その色やデザインの面白さを楽しむ事ができる。しかし、それはそれとして、植物達は、それぞれ来るべき活動の春へ向けて見えない所で着々と準備を始めている。けれども、集められる人々に対して、何か冬も活動している事をハッキリと見る事の出来る対称を、下見において探してまわった。するとアツアツ。落葉して裸木なのに、緑の実を幾つも付けたイヌビワの雄木を見つけた。更に幸運にも隣には対比に都合良く、実のない雌木も生えていた…やれやれこれで当日のメインテーマができたーと安心。しかし、かねてからイヌビワとイヌビワコバチの、互いを思いやる心を汲みとれるような、複雑で不思議な共同生殖活動の解説を、1時間という植物園見学の間に成し得るだろうか気が掛りとなった。そこで、当日お配りした、あの解説図を作ることにした。

さて、正午門前を出発。先づわかり易くて、今見るものとしての冬芽とその芽鱗(冬芽を保護する鱗状の外皮)と、昨年春の芽鱗痕(芽鱗の落ちた痕跡)のお話…。それによって、一年間に伸びた枝の長さがわかった。それから、園内を巡りつつ、樹種による木肌の特長や面白さを楽しんで頂いた。特に古い歴史を持つ京大植物園ならではの年を経た木々が多く、それぞれの木肌に古木でなければ味はへない澁さと風格が刻み込まれていた。そして、それが市内の京大キャンパス内という地理的に有利な条件にある所に大きな魅力がある。木々の例をあげればーチャンチンモドキ、シナユリノキ、モチノキ、トウカエデ、トウサイカチ、クヌギ、クリ、コナ

ラ、メタセコイア, etc. etc. …。

さて、残った時間を本題のイヌビワが雌雄並立する前で、その興味深い生態について、解説図を用いてのお話を進めたが、その中ばでタイムオーバーというプレッシャーが掛り、十分に「ガッテン」して頂けたかが心当たりとなっているが、皆さんから熱心な御質問を多く頂き乍ら、つつがなく終わる事が出来た。念の為、ここにその要点をまとめると、先ず生物史上、現時点におけるイヌビワとイヌビワコバチの関係は、全くの共存であって、どちらが欠けても双方の生殖があり得ず、双方の子孫存続も又同様である。即ち、イヌビワは、種子生産のための果実は通例通り雌木に設置しているが、一方の雄木には、本来不必要である筈の果実(果のう)を作り、先端に花粉を出す、ほんの少しの雄蕊をセットするのみで、下部の広い果のう内をイヌビワコバチのあたかも子宮の如き機能として改造して提供し、イヌビワコバチの幼虫への栄養供給と子育ての役目を担当している…と言えば御理解頂けるであろうか。とにかく、前述したが、その働きには、双方の意思伝達やコミュニケーションが否定出来ない程の思いやり関係が見られる不思議は、若い学究さんに期待する新分野と思っている。進化論はヒックリ返せるのでは?…。私の自然観察50年の直感である。

さて、終わった後も、言い残したことが、あれこれと思い出されて、反省することあまたである。尚、林内では縄文前期甕棺遺跡を出土の状態で見ることが出来るのも、植物見学後の一興となろう。

京大植物園を考える会 <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

「ひとつまえにもどる」

Copyright (C) SCOOP. NET Kyoto-Univ CO-OP. All Rights Reserved..